

## 新・寺田寅彦断章の出版に想う

四月三十日に上田寿先生「出版を祝う会」が、高知会館で開催され参加した。『寺田寅彦断章』は平成六年十月に購入し読んでいたけれど、『新・寺田寅彦断章』は読んでないと思って、会で購入読了後、自分の書棚にあり、新聞の切り抜きも持参していることに気づき、毫録だなど思った。

上田先生とは「友の会」で何回かお会いし自家は安芸市と云うと、先生のご親族も安芸市住で、筆者の知人とわかり、一層親しくなった。先生と「友の会」の行事で須崎に行った時、寅彦の副振動観測のこと、昭和二十一年の南海地震の時の津波の潮位が高かった所など、実地に説明頂き、県文学館での、寅彦の展示会でも、寅彦の実験（砂層の崩壊）などを、くわしく教示いただいた。これが『新・断章』の中に“技術者魂に感動”としてあり、なつかしく読んだ。“潮汐の副振動”も“須崎や久礼でも観測”としてある。「雪の科学館友の会」との交流が高知で開催された時や懇親会などでもご一緒いただいた。先生の御葬儀に出られず気にしていたので「出版を祝う会」に出て、先生のご親族の方にご挨拶して、肩の荷をおろした思いである。

「出版を祝う会」では、梅澤俊一、北添康弘、今井嘉彦、鈴木康夫、橋井昭六の五人の先生がテーブルスピーチをなさって、上田先生の多彩なお人柄とお仕事が一層浮き彫りにされた。お嬢さんの肖像画のこと、蒲原先生とご懇意だったこと、高知医科大で上田先生と論文を作成（遺伝子の配列）したこと、上田先生と廃棄物処理場を廻られ、環境問題にかかわり、環境問題総合研究会でご一緒され、須崎の津波対策をたて、スケッチをいただき高知新聞社で上田先生の本の出版にかかわった。上田先生は山田家・家老の出で、上田姓へご養子に入られた。先生のご父君も絵に堪能、またご一家は剣道に強いことなど、ご披露された。最後にお孫さんの今井裕子さんのご挨拶があった。要約すれば「祖父ともつと話しておけばよかったと悔むこともあり。実家へ帰って仏壇の間で泊まりました。祖父は一昨年の中頃に体調を崩し一昨年十一月に、あつけない別れとなりました。こうして祖父の出版を祝う会を催していただき、親しかった人々に祖父のことを話し合っ下さって、祖父もよろこんでこの会を見ていくと思います。私も亡くなって改めて祖父の偉大さを感じております。これからも祖父の残した仕事を整理しなければならぬと思いますので、皆様のご支援をお願い致しますと共に、私も会の一員に加えていただきます。自分にできることをしなければと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願ひしまして、お礼のことばとさせていただきます。有難うございました」。

上田先生の描かれた裕子さんの肖像画についての雑談では、モデルになつて祖父の言葉をよく聞かされた由。実に雰囲気の良い美人で、理想のお孫さんと感じた。

また見せていただいた上田先生の画帳には、風景画も七―八枚あり、若い女性の習作も何枚かあった。上田先生は寺田先生の如く絵も上手で『断章』の中にもスケッチはあった。帰宅して『新・寺田寅彦断章』を読んだ。“潮汐の副振動”“須崎や久礼でも観測”“ラウエ斑点の研究”などの中に、写真、図画などが沢山あつて、見て楽しくわかりやすい。上田先生は岩波書店刊の『寺田寅彦全集』第一五巻の解説者でもある。寅彦の物理学を研究され、紹介者の大役を果たされた。自然をよく観察し、直観を大切にして実験する寅彦の手法をご自分の手法とされて、『断章』で寅彦の物理学を追体験されたと思う。上田先生ご自身、地球物理学者として、防災科学を重視され、昭和南海地震の直後県内六ヶ所の

津波災害地区の実体調査をされ「津波対策の諸問題」の冊子を出版されている。更に『新・断章』にはないが、環境問題研究会一〇周年記念史に載せられた「津波から身を守ろう」の論文で、地盤の伸縮傾斜の測定、地磁気や地電流の変化、微小地震計の研究等が地震予知のため必要と書かれている。何のための物理学か人々の求めている科学は何か、との自身への問いが、先生も寅彦のように防災の科学、非線形物理学を志向したように思われる。

寅彦の哲学、認識論（物理学序説等）から彼の文学、科学、芸術が融合され彼の人格が形成された。今、物理学でも寅彦のように感性を通してありのままの自然を見、非線形科学（茶碗の湯、墨流し、椿の花の落ち方等）にとりくむことによつて、人は自然と科学に親しむことができると思う。

「ありのままの自然の中でどういう現象が起り、それがどういう法則に支配されるかという未知の分野を追求するほうが意味があるという時期がくるかも知れない。案外近い時期にくるかもしれない。そういうことを私は感じているわけです。」朝永振一郎「科学と文明」（講演）より。

友の会 会員 高知県 田中潤一郎 二十三年五月